

この夏 ヒトはトリを追いつめていないか



—とくに高山の生物は、きびしい自然条件のなかで実にさまざまな生活のチエを身につけて、生き続けています。代表的なライチョウ（高山ではただ1種、留鳥として年中すむ）をはじめ、夏になるとやってくるホシガラス、イワヒバリ、カヤクグリ、イワツバメ、アマツバメ、ルリビタキ、ビンズイ、イヌワシなど、たくさんのもとトリたち——

でも彼らにとって、いま、高山は楽園といえるでしょうか——。

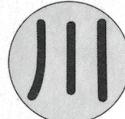
15年ほど前、北アルプスのライチョウを富士山の5合目附近に移殖したことあります。生活の場は異っても、順調に数をよし、富士がライチョウの楽園になるかと思われた昭和43年ごろ、突然に姿を消しました。

原因はキツネ——糞（ふん）の中に、ネズミや小鳥とともに、ライチョウの羽毛が発見されたのです。——自動車道路の開通で車が増え、登山人口が激増しました。

心ない人が行く先でゴミといっしょに残飯を放置するなどして山を荒らしました。そこへネズミ、キツネ、野犬などが、食物を求めて山の低地から高地へ移動してきました。そしてライチョウを襲った——つまり、ほんとうの原因是、ヒトよりもともと、食べる食べられるの関係（食物連鎖）というは、生物たちにとってはごく普通のことですが、一度でもヒトの行為が加わった食物連鎖のクサリは、そのほとんどが自然をダメにするという方向へもっていってしまうのです。もちろんそれは富士だけの問題ではなく、立山・室堂平や淨土山など）、乗鞍岳といった、かつてのライチョウの楽園は、同じような傾向をたどりつつあるといわざるを得ません。

むかしから高山の靈鳥としてうやまわれてきたライチョウひとつ取りあげても、彼女はこうして確実に減少しています。この暗い見通しのなかで、私たちはどうしたらよいと思いませんか。アルプスの山々を、キツネや野犬が、ヒトといっしょにけまわるときがくる——これは笑い話ではありません。

この夏、山へ登ったあなたは何を考えていらっしゃいました？



—私たちはそこで、いまどんなトリを見ることができるでしょう。チドリはいますか？

セッカは？セグロセキレイは？

水辺の汚染や破壊で追いつめられた

ひとつ例に、カワセミがあります。30年は

ど前には、東京中どこでも見られた、一年中川辺にすむコバルト色の小さな美しいトリでした。しかし、都市化がすむにつれて後退し、いまでは奥地の支流でたまに見かける程度の、珍らしいトリの部類になってしまいました。

それから、最近しばしば起こるトリの大量死。

燈台やナイターの照明に渡り鳥がぶつかったなどというトリの死にくらべると、水質・大気の汚染と、農薬など汚染物質によるトリの死は化学的で広範囲で、はるかにおそろしいものだということができます。

（日本鳥類保護連盟募集第一回選入優秀鳥標）

愛鳥の心が育てるよい環境

ライチョウ
のひづれ

セッカ

セグロセキレイ



—尾の腐った魚、背骨の曲がった魚、眼の出た魚、片眼の魚、頭におできのある魚、腹に穴のあいた魚、背びれや尾びれのない魚、寸づまりの魚、斑点（はんてん）だらけの魚、など、奇形魚を生んでいる汚れた海。海や

海辺でしか生きていけないトリたちの、変死したり大量死した姿を、黙々と海面に浮かべ、砂浜に打ちあてている廢油の海。彼らの生活を支配するのは「水」であることを考えるとき、この異常はや

はり、水質の汚染や変化が原因になっているといえます。ヒト、

という、同じ生きものの仲間として、私たちが

まず、率直に受け止めなければならないのは、これららの異常現象が、日本の各地で見られると

いうことです。毎なる海がはぐく

んできた資源は空氣と同じに人間に与えられたものだ、という考え方は、もう通用しません。これらを積極的に保護していくためにはどうすればよいか、死を繰り返している彼らの姿から目をそらしてはいけないと思います——。

——トリたちに起こっている現象をお話してきましたが、もちろんそれがすべてではありません。むしろ、知られている例は少なく、実態もつかめないまま消え去ろうとしている問題が多いのです。しかしこれらの原因は、結局は

ヒトが影響したものであることは間違いない事實であり、トリばかりでなく、いずれはヒト自身の問題となることもまた、認めないわけにはいきません。

花も咲かず、トリも虫も鳴かない状況の中で、ヒトが生きていくのははずのものです——この夏、私たちをとりまく環境を、もう一度、見つめてください。



財團法人 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、財團法人日本鳥類保護連盟の指導を得て、サントリー株式会社がシリーズとして制作するものです。



イラストレーション：鶴内正幸